

* これは実際の試験問題ではありません。
(This is NOT the actual test.)

No.000001

受験番号				
------	--	--	--	--

学習能力考査

人 文 科 学

資料及び問題

指示

係りの指示があるまでは絶対に中を開けないこと

1. この考査は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができたかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に 33 の問い(1-33)があります。
3. 考査時間は、「考査はじめ」の合図があつてから正味 70 分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて 70 分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります答えが指示どおりでないと、たとえそれが正解であっても無効になりますから、解答の仕方をよく理解してから始めてください。
5. 答えはすべて、この冊子といっしょに配られる解答用カードの定められたところに、指示どおりに鉛筆を用いて書きいれてください。一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれに消してから、あらためて正しい答えを書いてください。
6. もしなにか書く必要があるときは、必ずこの冊子の余白を用い、解答用カードには絶対に書き入れないでください。この冊子以外の紙の使用は許されません。
7. 「考査やめ」の合図があつたらただちにやめて、この冊子と解答用カードとを係りが集め終わるまで待ってください。集める前に退場したり用紙をもちだすことは、絶対に許されません。
8. 指示について質問があるときは、係りに聞いてください。ただし資料と問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

「受験番号」を解答用カードの定められたところに忘れずに書き入れること

I

日本文学史のジャンルに、和歌・連歌・俳諧などの詩歌や物語文学と並んで、日記文学というものがある。普通には、紀貫之が女性に仮託して仮名文で記した『土佐日記』を嚆矢とし、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』その他の平安女流の手になる作品から『建礼門院右京大夫集』(形は歌集だが、内容から通例日記文学に入れる)や『とはずがたり』等の鎌倉時代の主として官廷女房の作品を経て南北朝期の『竹むきが記』までを指すのであるが、しばしば日本文学に特有なものだと言われる。それは、この語を英訳(独訳でも仏訳でも同じ)しようとするときすぐ感じる問題で、最近も位藤邦生氏は、

ちょうど日本の歴史の時代区分で言う「近世」を英訳しようすると、それに当たる適当な訳語が見あたらないように、「日記文学」の英訳にも、頭を悩まされる。強いて英訳するために類似した用語を求めるなら、「自伝の文学」とでもなるうか。

と言っている。そしてまた、『土佐日記』以下平安時代の日記文学から『おくのほそ道』までを論じたアール・マイナー教授はこれを「詩的日記 poetic diaries」と訳し、『建礼門院右京大夫集』を訳したフィリップ・ハリス教授は「回想記 memoirs」、『とはずがたり』の訳者ツヴェターナ・クリステヴァ博士は「抒情日記 lyrical diaries」としている。いずれも日記文学諸作品の形態や内容の一面に着目しての命名とは認められるが、確かにこれにぴったり当たるものは欧米にはないようで、紀行・随筆をも含めてこのジャンルの問題点を検討して学位論文としたマリリン・ミラー嬢も、論文の中では「自伝的作品 autobiographical writings」と呼びながら、最終的にはタイトルをローマ字で「日記文学」としている。そして彼女は、西洋の自伝的作品が自己の「説明」であるのに対して日本の「表現」「表出」であり、より抒情的だとも言っている。

これを要するに、日記文学は日本文学に特徴的なジャンルとも言えそうである。そしてそれを、筆者などは日本人の日記好き、広く言えば記録好きに、主な原因があると考えてきた。「日記(注、ここではそれをつけること)への日本人の強い執着」はドナルド・キーン教授の語(『百代の過客』上の「序 日本人の日記」)によってもよく知られているし、旅先であるいはちょっとした集まりで、何かというスナップ写真や記念写真をとったりするのも、日本人にはごく普通のことだが、少なくとも一昔前まで外国では、あまり目にしないことであった。また日記文学が、しばしば自己告白や身辺雑記を主な題材とした私小説という、日本近代文学に特異なものを生み出す地盤を形成したと見られることも、忘れてはならない。

このジャンルが日本に特有かどうかということは少し後に回して、位藤氏の見解に示されているように、日記文学のいくつかの作品には自伝的傾向が確かに見られる。平安時代の諸作品は、『蜻蛉日記』と『更級日記』の他は一時期・一事件の体験を主としていて自伝的とはいかぬが、中世の作品には、『とはずがたり』を代表として、相当に自伝的なも

のがある。そこでちょっと本筋を離れて、自伝とその文学性ということについて、少し考えてみたい。

II

自伝や日記、また日記体小説や一人称小説についての論や研究は、日本でも欧米でも、このところかなり盛んである。その中で、自伝についての精密な研究『自伝契約』を著したフィリップ・ルジュンヌは、自伝の定義として、次の条項を挙げている。

1. 言語の形態
 - (a) 叙述的であること
 - (b) 散文であること
2. 主題 一個人の生活、一人物の歴史を扱うこと
3. 作者の状況 作者（実在の人物）と語り手とは同一人であること
4. 語り手の姿勢
 - (a) 語り手と主要人物とは同一人であること
 - (b) 叙述に回顧的展望があること

そして、例えば「回想録」は第二項に該当しないので自伝ではない、なぜならばそこでは同時代の複数の人物が主題にあずかり、作者の視点は自己にではなく複数の第三者に向いているから、とルジュンヌは言う。同じことをベアトリス・ディディエは『日記論』で、「自伝は個人の生活に、回想録は歴史の次元に、それぞれ重点をおく」と言っているが、たまたま目にした文学辞典類では、ノースロップ・フライたちの『ハーパー文学事典』は回想録を、「視野や行動が公的事件の私的側面に限られがちではあるが、自伝の一形式である」としており、例えば佐伯彰一氏の『日本人の自伝』にも、西洋の自伝にはアウグスティヌスに源を発してルソーに至る告白型の流れとカエサル（シーザー）の『ガリア戦記』に始まってチャーチルやドゴールにまで続く回想録の流れとがあると言っていて、これも一つの理解である。そして、スタンダールの自伝の一つとされる『エゴチスムの回想』は、作者みずから本文の冒頭に「回想録」と明記している。またルジュンヌは、第三項に関して、「その作品の中に自伝契約が存在していること」と言う。具体的には、作者が読者に向かって、これが自伝であることを、暗示的にであれ明示的にであれ、とにかく契約しておかねばならない、というのである。

そしてまた、ヨーロッパの近代の自伝の代表作とも見られるルソーの『告白』（『懺悔録』とも訳される）について、カッドンの『文学用語辞典 改訂版』は、「自伝というものは多分に創作的で、その例証はルソーの『告白』である。その内容は言葉通りには信じられず、別の文学的価値を有している」と述べているが、『自伝の文学』を著してその冒頭でルジュンヌの定義を紹介した中川久定氏に至るまで、自伝がいかなるときにいかなる根拠で文学

となるかについては、何も語っていない。あるいはそれは欧米では自明のことなのかも知れないが、一方で欧米では、文学の原語（英語で言えば *literature*）がもともと文字で書かれたもの一般を指すことから、文学と非文学との境界をわれわれほど画然と引く必要に迫られていないのではあるまいか。外国文学出身の佐伯氏も、自伝の文学性には何の疑いも抱いていないようである。こうして見ると、欧米の自伝に関する研究を日本の日記文学の考察に適用するのは、どうも無理のようである。それはとりもなおさず、日記文学の諸作品を単に外見のみで欧米の自伝と同一視するのは適当でないことを示していると言えよう。

III

そこで戻って、日本人の日記好きということであるが、最近筆者は、グスタフ・ルネ・ホッケの『ヨーロッパの日記』を読んで、ヨーロッパにも古来多くの日記があることを知り、日記をつけることが果たして日本人に特有的と言えるかどうか、疑問を抱き始めた。特に「訳者あとがき」は、「我が国のみに限らぬ今日の日記、回想記類の出版の盛況」を指摘し、「このように日記が一般に好んで読まれる事情」と「日記が好んで書かれる事情」に言及している。その「あとがき」はまた、近代ヨーロッパにおける日記の機能について、次のように説いている。少し長いが引用しよう。

ひとくちに日記といっても、それが書かれる動機によって性格はさまざまである。外発的には身の回りの出来事を同時代人としてつづさに観察記録し、それを後世への証言として遺そうという動機が少なからずある。この種の日記の歴史は古い、というよりはむしろこれが、日記の起源にある。情報や報告を提供することが日記の本質のひとつにかぞえられるという点では日記は日刊新聞の性格と一致している。ジャーナリズムが日記執筆から生れたことはすでにその言葉が示している。ドイツで近代的意味での最初の日刊新聞が発行されたのは1660年で、それまでは始めから刊行をもくろんで書かれた多くの日記がその任務を果たしていた（中略、日記に「ジャーナリスティックな特徴を与える発展」がイギリスで特に顕著であったことを、ピープス、ジョンソン、ボズウェルの名を挙げて述べ、またフランスのゴンクール兄弟によって日記が純粹に個人的な事柄であるという命題が否定されたとも言っている）。社会の歴史の源泉、情報源たる日記のこの伝統は、個人の内面生活の叙述に重点が移ったのちも、日記のいわば社会的機能としてずっと生き続けている。

「あとがき」は続けて、「しかしながら日記が自己探求の書であり、自己自身との自由な対話によって己れの意味で感情の深みへ到達するための手段にほかならないこともまた、ルネサンス以降日記のもうひとつの伝統をなしている」と言って、それは自己と自己の環境世界、自己と自己の時代の間を結び、その意味で日記は主観的歴史書であると言う。そして、目前のものと自己の個人的存在との間の衝突、外的なものとの緊張

関係の中で、「実存する<自我>は自己自身を<わたしは何か>という問いの中へ置く。存在するところのものは何ゆえかくあるのか、存在するわたしは何ゆえかくあるのか、われわれの実存形式はお互いとの関係においてどのようにあるのか これらの省察はほとんど常に道徳的、宗教的、哲学的、あるいは社会的性格のものである」と述べるが、これは一般的通念であろう。むしろ筆者は、「日記の発展史において好んで日記が書かれたのは、ヘレニズム、中世末期、後期ルネサンスから初期バロックまで、敬虔主義とロマン主義、王政復古による危機の時代、高度資本主義の激動期、世界危機に直面している現代、である」という指摘と、続く一文「解体の過程にある時代がすべからず主観的である（ゲーテ）のは、その時にこそ外界との関係において自己の実存を問いなおす内在的表現衝動が最も強く働くからである」という理由づけとに、蒙を啓かれた。と同時に、日本では平安時代以降、中近世を通じて、いや近現代にも、貴族・僧侶・武家・政治家・財界人・作家その他の手になる実に多くの日記があるが、その量産が必ずしも「解体の過程にある時代」に顕著とは言えないように思われ、日本における日記の繁栄には、やはり日本独自の原因・契機を考える必要があることを痛感した。

ところで、このホッケの大著『ヨーロッパの日記』は、第Ⅰ部を「ヨーロッパの日記の基本モチーフ」と題する（第Ⅱ部は「ヨーロッパ日記選」と題して、ほぼ時代順のアンソロジー）ように、主としてそれら日記における自己の表出法や題材などの考察、著者自身の語によれば「モチーフ研究を宗とした素材の分析と叙述」であって、「訳者あとがき」に言うように、「ヨーロッパの日記文学の歴史を描き出す」のでもなければ「文学の自律的なジャンルとしての日記という表現形式について論ずる」のでもない。したがってそこには、「年代記風日記」とか「覚え書 日記」「備忘録 日記」「<告白> 日記」「内面の日記」「<文学的>日記」等々、傾向特色に着目した一種の分類名は次々に現れ、中で「<文学的>日記」については「架空の日記」の言い換えとしてダニエル・デフォーの『ロンドンのペスト禍』をその早い例に挙げていることからその概念をおよそ推察することができるが、書中に頻出する「日記文学」の語が単に「日記」と言ったのとどう違うかなどは、明らかにされていない。そのことは、右に引いた「訳者あとがき」においても同様である。

IV

そこで次に、日本では日記文学がどのように定義されているかを見てみよう。大正末期に用いられ始めた「日記文学」の語について、その概念が議論されるようになったのは主として戦後のことで、昭和三十年代以降いくつかの定義があるが、今日ほぼ一般に支持されているのは、木村正中氏の語である。それは、

日記文学とは、やや抽象的な言い方をすれば、何らかの意味において主観的に自己を構想し、それを中心に事実的な素材を客観的な全体像にまで定着せしめた作品である。というのである。

したがって木村氏は、例えば平安中期の貴族小野宮実資^{あのみやさねすけ}の日記『小右記』^{しょうゆうき}に「時析洩らされている」彼の「批判的感情」が単なる事実や叙事でないことは認めつつも、「それらは結局全体の概念的・事実的な記述のなかで、筆者の激しい表現意欲が無原理的に流露した箇条があるというに過ぎ」ず、あるいは「まったく偶発的なのであって、そこに実資の人間観に裏づけられた人生が、明確な具象性をもって全体的に打ちたてられているとはとても言えない」と述べている。氏はまた、その後の論文でも、藤原道長の『御堂関白記』^{みどうかんぱくき}に「夕暮参院、乍立候。入夜出、月明如鏡（夕暮れ院に参り、立ちながら候ず。夜に入って出で、月の明かきこと鏡の如し）」とある一節を例に引いて、廷臣としての行動や見聞の記録を基調とした道長の日記に「たまたま月明を鏡にたとえた非実務的な表現があるからといって、ただちに文学となるであろうか」とも言っている。

昭和 38 年（1963）に発表された上の木村氏の最初の論は、今日ほとんど古典視されているもので、例えば近年堀内秀晃氏が、宇多天皇の日記の有名な黒猫の姿態を生き生きと描写して感懐を述べた条にふれて、

こうした率直な心情の吐露は散発的、偶発的なもので、内的な主題を立ててそれを持続的に記述の中で追尋して行こうとする「日記文学」に直ちにつながるものではない。

と言い、また山中裕氏が

『御堂関白記』等、公卿の日記は、事実を正確に日次^{ひなみ}に記すことに特徴があり、実録である。（中略）したがって、そのなかに、たまたま道長や実資の感情のような面が見えても、また、みやびの特徴があっても、それは、そこに、日記の第一の目的があるわけではなく、そこから日記に道長の人間性が全体的に統一されて立てられたというようなものではない。いわば、主題の統一性というものが、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』のような日記文学には、はっきりと見えるに反して、これはあくまで日記、すなわち、古記録である。ここが、日記と日記文学の相異とはっきり言えよう。

と述べているのも、その線上にあることは明らかである。

以上の所説を理解する参考に、有名な例を挙げよう。寛仁 2 年（1018）10 月 16 日、道長の娘たちが皇后や皇太后となり、彼が三人の後の父となるという栄誉を得て、その喜びを「この世をば」と詠んだ折の記述であるが、『御堂関白記』には

後敷円座於簀子、召上卿於御前。給^{ついがさね}衝重、又階下召伶人、数曲。数献之後、給禄。

大^{うちき}褂一重。於此余読和歌、人々詠之。事了分散。(後に円座を簀の子に敷き、上卿を御前に召す。衝重を給ひ、又階下に伶人を召し、数曲。数献の後、禄を給ふ。大褂一重ね。ここにおいて余和歌を読み、人々これを詠ず。事了り分散す。)

とあるだけで、彼自身の感情も肝心の歌も記されておらず、この日記はここでは無味乾燥である。これに対して実資の『小右記』は甚だ詳しく、

召公卿。摂政^{いか}己下参入著座。次居^{すえ}衝重了。太閤(注、道長)執盃進居上頭。(中略)次々勸盃、人已無其道。仍撤衝重、甫階東腋敷座、召伶人給衝給。卿相・殿上人等舷歌。人々相応、堂上地下糸竹同声。三四巡後、太閤戯云、右大将(注、実資)可勸盃於我子摂政(注、頼通)余執盃勸摂政、摂政^{わたす}度左府。左府献太閤、太閤度右府。次第流巡。次給禄太閤己下大褂、(中略)又給伶人禄。太閤招呼下官(注、「私」の意)云、欲読和歌、必可^{てへり}和者。答云(注、私=実資が)何不奉和乎。又云(注、道長が)誇たる歌になむ有る。但非宿構者。此世をば我世とぞ思望月乃産たる事も無と思へば。余申云、御歌優美也。無方酬答、満座只可誦此御歌。(中略)諸卿響応余言、数度吟詠。太閤和解、殊不責和。夜深月明、扶醉各々退出。

とある。さきの文章で山中氏が念頭に置いているのは、例えばここに実資が記した彼自身や道長の感情とその描写とか、あるいは道長がその喜びを歌に詠んだり、それを一座の者が吟詠したりしたこととかであると思われる。

V

これに対して、『小右記』や『御堂関白記』のような、平安時代以来の主として貴族がその日その日に記した漢文体(正確に言えば多分に日本化した、いわゆる変体漢文)の日記をも日本文学の範囲に入れるべきだと唱えたのが、石田吉貞博士である。博士は日記文学の条件を、

1. 月日を追うて記録したもの
2. 自己又は自己の属する社会の生活を記録したもの

の二つとした。そして従来日記文学とは認めてこなかった『御堂関白記』や『明月記』の類が、よく言われるように部分的に恐らく「文学的興奮」をもって記され、また読む者にもそうした感動を与えるのみならず、例えば源平興亡の激しい社会の動きを宮廷貴族の角度から写した九条兼実の『玉葉』や、貧苦と病苦と不遇にあえぎつつ一天才詩人が生涯にわたって魂の^{きよき}戯^きを綴った藤原定家の『明月記』のごときは、まさに文学であると論じた。

これを承けて筆者は、右の二つは日記文学の必要条件ではあるが十分条件ではないとして、

3. 文学としての意識をもって創作されたもの

を加えることを提案した。生活と芸術の分化していなかった原始時代は措いて、わが国の平安時代以降の文学史を考えると、創作主体の文学的な志向や意識を無視することはできないと思うからである。

以後、この石田博士説と重なり、あるいはそれに賛同する論も出た。その一つは昭和 47 年（1972）に発表された位藤氏の論で、氏は、「漢文日記における心情語彙の貧しさ、感情表現の固定性など」も必ずしも日記文学に必須の「自照性」の欠如を示すものではなく、それは自照性の現れ方の差であって、漢文日記の文辞の中に作者が「自ずと漏らした感懐」に、仮名日記におけるそれとは違った現れ方の「自照性」がある、と言う。そして漢文日記は記録であるが、記録であるが故に直ちに文学でなくなるのではなく、そこに主観による素材事実の選択があり、そこに「記録者の心」が表出されたとき文学となり得る、と説く。そして、

文学を考える際に重要なことは、事実を記録するという場合の、事実そのものではなく、むしろ事実を記録するという記録者の態度なり、意識なりである。

とし、さらに書きとめられた事実が、記録者と係わっている、その係わり方に注目すべきで、つまりは「記録者の、現在生きているという確かな事実と、書きとめられる事実との間の緊張関係」で捉えられるべきだと説くのである。

もう一つは、先年井上宗雄氏がある講演で述べたもので、「筆者（注、漢文日記の作者）は、わきおこってきた感動を、あるいは美的な雰囲気、単なる事実の記録を超えて、ある洗練された文章で写しとろうといった面が、日記には多かつたような気が」と言い、記事の叙述にしばしば記者（注、筆者・作者と言っても同じ）の「強い喜怒哀楽の情」が「噴出」し、それが「類型的な文体と格闘しながら、それを超えて読む者の胸に強く迫ってくるような気が」する、「一種の強い述懐性・叙情性というものを記録は持つ場合がある」と言っている。また、政治的・社会的局面における「強い批判の精神」も、特に中世の日記になると多くなるが、そうした「描写性とか叙情性とか、批判性とか思想性とかいったもの」が色濃く出ているところに、氏は漢文日記の文学性を認めるのである。

VI

漢文日記 念のために言えば、それらが漢文ないし変体漢文で書かれていることはほとんど問題ではなく、日々に記された記録であることが問題なのである が文学であり、そ

れらをも日記文学の中に入れるべきだとするのは、上述の三氏が主である。

ところでそれら日々の日記には、主題や構想・構成への意識とか描写や叙述等表現への配慮、さらに言えば文学意識つまり文学としての意識があるのであろうか。それについて、これらはないと開き直っているのが位藤氏で、特に最後の文学意識について、その有無や強弱と作品の文学性の高低とは無関係であることを「親鸞や法然の法語あるいは『愚管抄』や『神皇正統記』といった史論とか」を例に挙げて力説したのが井上氏である。

上の三氏の論点については、筆者に同感できるところも少なくない。特に、いくつかの日記が、あるいはその随所が、読者に与える興奮や感動については、それが題材・内容から来るにせよ、描写の妙によるにせよ、あるいは作者の真摯な姿勢や生き方に打たれるからにせよ、毛頭否定しない。また文学意識の問題も、今の筆者は、かつてほどにはそれにこだわらなくなっている。簡単に言えば、作者が明確に文学としての意識・意図を有したものでなくても、結果的に文学と見得るものならば、文学作品の範囲に入れてよいと思うし、そこでは宗教美術や工芸品のアナロジーが使えるかとも思うが、その場合も筆者としては、仏師なり画家・工芸家なりに、無意識ながら芸術意識があったと考え得るので、文学ないし芸術意識の問題を全く忘れてよいとは思っていない。

そしてまた筆者には、全体を通じて一つの素朴な疑問が消えないのである。それは、仮に個々の日記を一つの文学作品と認めるならば、その文学性をどのように測定あるいは分析評価するのか、と言うことである。各氏の論で、少なからぬ日記に文学性の片鱗ないし要素が特に色濃く出ていることは説き尽くされており、繰り返す通り筆者もそれには同感であるが、『玉葉』なら『玉葉』『御堂関白記』なら『御堂関白記』を、文学作品としてどのように評価したらよいのであろうか。評価や文学史的な位置づけには、断片的な感動や印象批評だけでは足りない。やはり例えば主題・構想・叙述の各面に着目してその達成度や創造性、時には影響度・被影響度を測るといような作業が必要であろう。

その場合、主題については、文学論に立ち入れれば、作者の意図を推測すべきか、読者が自由に認定すべきかの問題があるが、当面の漢文日記の場合、さきに名を挙げた位藤氏と同じく筆者も、作者の設定したものは通例なかったと考える。けれども読者が作品すなわち個々の日記から意義ある主題を引き出せるならば、それは統一的な文学作品として認め得ると思うが、もしもその主題が希薄であったりいくつも乱立していたりすれば、その日記の文学性は高いとは言えないであろう。

構想・構成にしても同様で、特にこれは客観的に認定しやすい。東西の自伝や回顧録の多くに実際の事実と異なる記述のあることが指摘されており、それらの中には単純な記憶の誤りもあるが、『とはずがたり』やルソーの『告白』などには、何らかの意味で作者が意図的に行った変改や臆化も推測されている。これらは通常「虚構」と呼ばれ、主題とも関係することだが、少なくとも『とはずがたり』においては、作者は事件の年月や順序に変更を加えたりして事実から遠ざかった箇所がある代わりに、それらの箇所で作者の期待した真実性が増しており、そうした虚構は作者の文学的欲求によるものと考えられる。こ

れに対して、ただ日次^{ひなみ}に記していった、作者の都合や気分なり病気や死没なりで打ち切られた日記が、全体としてすぐれた構成を有するとは認めがたく、その文学性には疑問がある。前述のディディエは『日記論』の第三部で「文学作品としての日記」を検討すべく、訳者によれば「構造の欠如したジャンルである日記の隠された構造と形態をさぐる」ことを試みたというが、少なくとも著者は、日記に「物語の論理」がないことを認める一方、作家達の日記などにしばしば推敲や清書の行われることにふれて、そこでは「その日その日」より論理的秩序が重んじられ、その結果日記は「さまざまな記事の集りになってしまい、もはや日記ではない」と言っている。文学の概念を従来と大きく変えない限り、文学性の追求は日記の自壊をもたらすと言ってもよいであろう。

叙述ないし表現についても全く同じで、漢文日記の中にはしばしばすぐれた描写もあれば読む者の心を打つ名文句もある。しかし、そうした花が所々に美しく咲いているからと言って、未開の原野をすぐれた庭園と言えようか。

ここまで来ると、筆者は久保田淳氏の名言を思い出さずにはいられない。氏は戦後の日本文学研究をリードした文学観ないしは文学史観が、戦前の「美文意識に拘束された文学観を大きく修正」して「文学研究の場における人間性や社会性・歴史性の復権」をなした功績を認めつつも、「同時に忘れてはならないのは、文学が言葉を表現手段とする芸術であるという、もっとも素朴な公理である」ことを確認するとともに、

事実は小説よりも奇なり、という。時として、事実は虚構よりも興味深い。けれども、事実の羅列をもって文学と見なすことはできない。個性を有する主体が、ある主観の下に素材を選択し再構成し、それを最も適切と考えた言葉で表現したものでなくては、文学作品とは言いがたいのである。

と言った。これは文学研究の出発点であると、筆者は考える。

だからと言って筆者は、主題の希薄さや構成の散漫、時には非文学的な夾雑部分の多さを理由に、いくつかの漢文日記の文学性、もっとはっきり言えばその片鱗ないしはその側面を、全く無視し否定しようというのではない。けれども虚心に考えるとき、それらは例えば『十六夜日記』の主題が不明確であったり『春の深山路^{みやまじ}』や『竹むきが記』が推敲不十分で凝縮度が足りなかつたりする以上に、一個の文学作品としては完成度が低く、文学としては未熟なものと言わざるを得ないと思うのである。

参考文献

ディディエ、ベアトリス 西川長夫・後平 隆共訳『日記論』(松籟社、1987年、原著は *Beatricedidier; Le journal intime*, Presses Universitaires de France, 1976)
ボッケ、グスタフ・ルネ 石丸昭二他訳『ヨーロッパの日記』(最書ユニベルシタス 300、法政大学出版局、1991年、原著は *Gustav Rene Hocke: Das Eurpaishe Tagebuch*, Limes

Verlag, Wiesbaden, 1963)

石田吉貞「中世の日記・紀行文学」(『岩波講座日本文学史 中世 I』、昭和 33 年 4 月、『新古今世界と中世文学(下)』<北沢図書出版、昭和 47 年>再録)

位藤邦生「漢文日記研究序説 文学性発見の視座」(『中世文芸』50 号前集、昭和 47 年 6 月、『伏見宮貞成とその文学』<清文堂、1991 年>再録)

木村正中「日記文学の成立とその意義」(『解釈と鑑賞』昭和 38 年 1 月「平安朝文学史」特集) Lejeune, Philippe: *On Autobiography* (ed. by Paul John Eakin, tr. by Katherine Leary, *Theory and History of Literature*, vol. 52, University of Minnesota Press, Minneapolis, 1989)

中川久定『自伝の文学 ルソーとスタンダール』(岩波新書、1979 年)

佐伯彰一『日本人の自伝』(講談社、昭和 49 年)

次の問題（1 - 33）には、それぞれ a , b , c , d , e の答えが与えてあります。各問題につき、a , b , c , d , e のなかから、最も適当と思う答えを一つだけ選び、解答用カードの相当欄にあたる a , b , c , d , e のいずれかのわくのなかを黒くぬって、あなたの答えを示しなさい。

1. 日記文学（以下、この語を日本文学史の一ジャンルの呼称に限って用いる）を西洋の類似の文学と比較したとき、しばしば特徴的とされるのは、次のどれか。
 - a. 主として作者の回想を内容としていること。
 - b. 作者の視点が多く自己の内部に向いていること。
 - c. 題材に対する作者の態度が抒情的であること。
 - d. 内容が多分に記録的であること。

2. 日記文学の説明として、資料から正しいと判定し得るものはどれか。
 - a. 日本文学史の各時代を通じて作られてきた。
 - b. もっぱら仮名文の作品である。
 - c. 物語文学と同じく平安女流文学の系統に立つものである。
 - d. 回想・自伝を内容とするものが多い。

3. マイナー教授が日記文学を「詩的日記」と呼んでいるのは、主として次のどれによると考えられるか。
 - a. 作者に紀貫之以下歌人が多いから。
 - b. 散文の中に詩歌を挿入したものが多いから。
 - c. 七五調のようなリズムカルな文体を主としているから。
 - d. 詠嘆的表現が多いから。

4. 自伝の定義をルジュンヌに従うならば、夏目漱石の『坊っちゃん』は自伝とは言えない。その理由を次の中から選べ。
 - a. 主人公の本名がどこにも記されていないから。
 - b. 主人公の生涯の一部分しか描かれていないから。
 - c. 主人公以外の人物も多数登場するから。
 - d. 主人公が作者自身であるとの保証がないから。

5. ルジュンヌの基準を日本文学のいくつかの作品に適用したとき、次の中でルジュンヌの理解に誤りのあるものはどれか。但し、各作品に関する事実の説明は正しいものと考えよ。
- a. 『伊勢物語』は古く在原業平の自伝のように見られていた。しかしどこにも自伝契約がないから自伝ではない。
 - b. 『蜻蛉日記』は冒頭にわが身の上を日記に書くと明記してあるが、この「日記」は自分の体験記とでもいった意味である。そして内容からも自伝と見てよい。
 - c. 『和泉式部日記』は主人公が一人称でなく三人称で書かれている。その点で自伝とは言えない。
 - d. 『とはずがたり』には、作者の記憶の誤りのほか、構想上の要求にもとづくと思われる相当の虚構もあるが、末尾に自伝である旨の断りがある。それゆえ自伝と見得る。
6. 自伝契約についての論述として、次の中で正しいものはどれか。
- a. 自伝であることを契約するもので、作者の意図とは関係がない。
 - b. 回想録は自伝と違って自伝契約がなされていない。
 - c. 日本の日記文学においても、自伝契約はまずなされる。
 - d. 自伝契約には告白型と回想型とがある。
7. 自伝と回想録との関係について、次の中で正しいものはどれか。
- a. 回想録も自伝の一種であると考える人と、それは自伝ではないとする人とがある。
 - b. 自伝とは主として自己の生涯を回顧して語ったものを言い、その時代環境にも多くふれたものは通例回想録と呼ぶ。
 - c. 自伝は本人のそれまでのほとんど全生涯を述べるが、回想録は特定の事件の体験を述べるのが普通である。
 - d. 自伝は多く告白的であり、回想録は多く説明的である。
8. かつて、『歎異抄』や『正法眼蔵』のような宗教的な作品や江戸時代の思想家の著述などが日本文学史でほとんど無視されていたことを、フランスの文学史ではパスカルやデカルトなども取り上げていることを例にして批判した論があり、またそれに対する日本文学研究者の、反論もあった。このことから思い合わされあるいは推測されるのは、次のどれか。ただし前者の批判した立場を A、後者の反論した立場を B と略称する。
- a. A は作品の普及度や一般性を無視していると、B は反論した。
 - b. A は文学をかなり広く捉えようとしたのに対し、B はその内容が問題だとした。
 - c. A は文学にも思想性が必要だと言い、B はそれはかならずしも必要ではないと言った。
 - d. A は文章の美にも着目したのに対し、B は美文はかならずしも文学の条件ではないとした。

9. 3 ページに「ジャーナリズムが日記執筆から生れたことはすでにその言葉が示している」とあるが、これを分かりやすく説明したものとして、次の中から正しいものを選び。
- ジャーナリズムの文体は、もともと日記に用いられたものであった。
 - 日々の事件や情報の提供という点で、日記はジャーナリズムの原型と言える。
 - 日刊新聞が発行されてジャーナリズムが成立するまでは、日記がその代用をつとめていた。
 - ジャーナリズムという語の原語と日記のそれとは、語源的に関係がある。
10. 西洋の日記について、次の中で資料(引用部分を含む)の内容に反するものは、どれか。
- 見聞した出来事を記録して後世に伝えようとする意図が、その起源にあった。
 - 時代の転換期に多く現れている。
 - 終始作者の個人体験を叙述し、その範囲を出ようとしていない。
 - 自己との対話を通して自己の存在意識を問いかける姿勢がある。
11. 3 ページの引用でイギリスで顕著であったという「ジャーナリスティックな特徴を与える発展」とは、どのようなことを指すと考えられるか。次の中から選べ。
- 日記をつけていた人が多く新聞界に入ったこと。
 - 日記に社会的事件やその批判を記すことが多くなったこと。
 - 日記が多く出版され、世間に普及するようになったこと。
 - 日記に回想よりも日々の感想が多く記されるようになったこと。
12. そのすぐ後に、「ゴンクール兄弟によって日記が純粹に個人的な事柄であるという命題が否定された」とあるが、これを正しく言い換えたのは、次のどれと考えられるか。
- ゴンクール兄弟は、交換日記というものを創始した。
 - ゴンクール兄弟は、その日記を公開した。
 - ゴンクール兄弟は、日記に非個人的な題材を盛り込んだ。
 - ゴンクール兄弟は、日記は個人的なものだという説に反論した。
13. 日本の日記について、次の中で資料(引用部分を含む)に照らして正しくないと判断されるものはどれか。
- 幕末維新期に、特に多くの日記が書かれている。
 - 天皇・皇族・貴族・僧侶以下、各階層の作者がある
 - 日本化した漢文体で書かれたものが多い。
 - 個々の日記の文学性については、議論の余地がある。

14. 「日記は主観的歴史書である」ということを分かりやすく言い換えたとき、次の中でもっとも適切なものはどれか。
- a. 日記は作者の主観が入っているけれども、歴史の資料として有用である。
 - b. 日記は作者の主観にいろどられているけれども、多く集めれば歴史書に匹敵する。
 - c. 日記は作者の主観が投影しているにしても、本人にとっては歴史すなわち自伝である。
 - d. 日記は作者の主観を通して見た環境や時代の記述である。
15. ホッケが「<文学的>日記」と呼んでいるのは、次のどれであると考えられるか。
- a. 作者が詩人・小説家など文学者である日記。
 - b. 作者が文学的意図で推敲や清書を行った創作。
 - c. 名文で綴られ、文学としての評価の高い日記。
 - d. 日記の体裁をとった小説などの創作。
16. 次の中で、木村正中氏によって日記文学の要件とされていないものはどれか。
- a. 自己の見聞や体験を素材として具象的な描写を有すること。
 - b. 自己の主観的な感想、感情を基礎とすること。
 - c. 作者の人間観に裏づけられた人生観が全体の基盤をなしていること。
 - d. 事件の叙述において単なる事実の報告を越えて批判精神が見られること。
17. 次の中で、漢文日記について堀内秀晃氏と山中裕氏とが共に述べていることはどれか。
- a. 漢文日記にも、作者の主観的な感情の見られる部分がある。
 - b. 漢文日記には、主題を立ててそれを追求しようとする姿勢がある。
 - c. 漢文日記に対して日記文学には、統一的な主題がある。
 - d. 漢文日記は、たとえ偶発的な事件でも生起したものを正確に記録するのが趣旨である。
18. 次の中で、6 ページに引用した『小右記』の一節から読み取れないものはどれか。
- a. この日の宴会は、「めぐる盃かげさして」といった有様であった。
 - b. 作者（小野宮実資）は道長の言いつけでその子頼通の盃に酒を注いだ。
 - c. 道長は、自作の和歌を即興当座の詠で自慢の歌だと言った。
 - d. 一同は作者の呼びかけで唱和の歌を作り、数度吟詠した。

19. 次に引用するのは『明月記』の冒頭近くの記事で、文学的であるとしてよく引用される部分を訓み下しにしたものである。これと気分や情景がもっとも近い詩歌は、後のどれか。

天晴る。明月、片雲無し。庭の梅盛んに開き、^{ぶんぼう}芬芳四散す。家中人無く、一身徘徊す。夜深く寝所に帰る。^{ともしびぼうふつ}燈髻髻として、猶寝に付くの心無し。更に南の方に出で、梅花を見るの間、忽ち炎上の由を聞く。いぬい乾の方と云々。^{はなは}太だ近し。

- 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる（古今集）
- 大空は梅のにほひにかすみつつもりもはてぬ春の夜の月（新古今集）
- 梅が香にむかしをとへば春の月こたへぬかげぞ袖にうつれる（新古今集）
- 旅館の寒燈独り眠らず、客心何事ぞうたたた転凄然（唐高適）

20. 次に引用するのは『明月記』の定家晩年の一節を、やはり訓み下しにしたものである。後に挙げた詩歌や短文で、これと気分・感情がもっとも近いものはどれか。

夜に入り、北の小屋に宿す。朧月に懐旧の思ひを催す。治承三年（1179）三月十一日、始めて青雲の籍に通じ、遠く朧月の前を歩む、時に十八。寛喜三年（1231）三月十一日、猶頭上の雪を戴き、僅かに路間の月を望む、時に七十。（中略）故人の泉に帰するを聞く毎に、弥々老翁の残涯を悲しむ。暁鐘に帰る。月、已に山に近し。

- 春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき（古今集）
- 照りもせずくもりもはてぬ春の夜の朧月夜にしくものぞなき（新古今集）
- 梅の花あかぬ色香もむかしにて同じかたみの春の夜の月（新古今集）
- そもそも一期の月影傾きて余算すでに山の端に近し（方丈記）

21. 石田吉貞博士が漢文日記も日記文学であると唱える根拠として、もっとも主要なものは次のどれであると考えられるか。

- 一見漢文のような文体であるが、当時すでに日本語として訓み下されていた。
- 事件・体験に対する作者の主観的感情が見られたり、それらが読者を感動させたりする。
- 内容が作者自身やそれを取り巻く社会の動きを如実に伝えるものである。
- 執筆態度が真摯であれば、主題や構想への顧慮は大きな問題ではない。

22. 位藤邦生氏によれば、漢文日記はいかなる場合に文学と見得るか。次の中からもっとも適切なものを選べ。

- 作者が文学にたずさわっているとの意識を有しているとき。
- 作者の心情や感懐がおのずと漏らされているとき。
- 作者の記録した事実が作者の主観的な選択にもとづいているとき。
- 作者の態度や意識の根底に作者の生の自覚と表現への配慮とがあるとき。

23. 資料の範囲で、漢文日記の文学性を訴える三氏の視点に共通して欠落しているものは、次のどれか。
- 自照文学に必須な自己省察の検証。
 - 構想の完結性の検討。
 - 文体・修辞等への顧慮。
 - 題材と表現との関係への配慮。
24. 漢文日記とその文学性に対する井上宗雄氏の理解を列挙したとき、次の中でもっとも不適切なものはどれか。
- 漢文日記の作者にも、その文体なりに表現字句への配慮はあり、かならずしもただ思いつくままを書きつけたのではない。
 - 漢文日記にも、作者の抑えがたい感情が事件の記録の背後に見えることがある。
 - 漢文日記には作者に文学としての意識はないが、それでも作者の実感が率直に記されている点で、空疎な美文よりすぐれている。
 - 漢文日記にしばしば見られる述懐性や批判性・思想性等は、文学性の有力な条件である。
25. 次に挙げるのは、漢文日記の文体について、かつて述べられた意見である。この中で右の論文の筆者の立場にもっとも近いと思われるものはどれか。
- 純粋な漢文の語彙・語法に従わない点が多く、かなり異様なものである。
 - 仮名文と比べれば、どうしても観念的になりやすく、心情表現などには不利である。
 - 純粋な漢文作品は日本文学と見ることに問題があるが、日本化した文体なら問題ない。
 - 語彙も語法も日本語を基としており、仮名交じり文と本質的な相違はない。
26. 資料に現れた筆者の芸術観に従うとき、次の中で芸術と見ることに抵抗の一番少ないものはどれか。
- 呪術的意図で制作されたと思われる縄文時代の土偶で、われわれに美的感動を与えるもの。
 - 子供が思わず口ずさんだ即興自作のメロディーで、断片的ながら美しく聞こえたもの。
 - 事件の報道写真で、写された人物の表情も生き生きとして構図もすぐれているもの。
 - 観光客などがなくさみに作ってみた楽焼茶碗で、形も描いた絵もおもしろくできたもの。
27. 『土佐日記』に次のような一節がある。帰京の船路で、天気がよいから早く漕げとの作者の命令を受けた船頭が船子（漕ぎ手）たちに、「みふねより、おほせたぶなり、朝北の、いでこぬさきに、綱手はや引け（船主様からお言いつけだ、朝北風の吹いてこないうちに、綱を早く引け）」と言ったのを記して、これは船頭が自然に言った言葉であって、彼は歌（短歌）のようなものを詠もうとしたわけではないが、歌めいて聞こ

えるのはおもしろいと思った、というのである。この話と右の論文とを併せ考えて推論するとき、論理的に可能なものはどれか。但しここでは、『土佐日記』の作者と主人公を、ともに貫之と記す。

- a. 貫之に船頭のこの語が歌めいて聞こえたのは、そのリズムによると考えられるが、同様なことは今日の標語にもしばしば見られる。
 - b. 貫之は船頭のこの語を歌と認めていないが、そこには多少とも文学意識を重視する態度が見られ、右の論文の筆者と同様な立場と言える。
 - c. 「歌めいて聞こえるのはおもしろい」という貫之の語を、一応歌と見てもよいという意味に解するとすれば、貫之の立場は位藤氏に近くなる。
 - d. この船頭の語は、短歌形式に合っているという点で井上氏の言う「洗練された文章」に匹敵し、同氏の立場に立てば詩歌と見なし得る。
28. 漢文日記について述べた次の四つの短文のうち、資料（引用部分を含む）に照らして正しいものはどれか。
- a. 心情語彙の貧しさ故に自照性に欠ける。
 - b. 単なる記録以上の叙情性を持つことがある。
 - c. 記録の素材事実の選択に叙情性が表出される。
 - d. 感情表現が固定されていて批判精神が乏しい。
29. 漢文日記の文学性について、筆者の見解は次の中のどれか。
- a. 作者に主題や構想への意識がほとんどない以上、文学性を認めるのは困難である。
 - b. 主題の有無は読者の判定にまってもよいが、それが作者にとっても有意義なものでなければ文学性には疑問がある。
 - c. 読者が主題を認定することができても、構成について作者の配慮がなく、結末が偶然的である以上、文学性が高いとは言いにくい。
 - d. 作者の配慮が、主題や構想のみならず叙述にも及び、ある程度彫琢された表現をとっていないければ、文学性があるとは言えない。
30. 文学性ということについての筆者の見解は、次のうちのどれか。
- a. literature には非文学的なものもある。
 - b. 作者の何らかの意図がなければならない。
 - c. 論理的秩序や構成より表現への配慮が重要である。
 - d. 叙情性や批判性が文学性の根本である。

31. 久保田淳氏は、本資料に一部を引用した評論の別の箇所でも、引用部分と全く同じ論旨で、書簡や記録（漢文日記もそれに属する）を安易に文学の範囲に入れることに反対している。次の中から、その論拠としてふさわしくないものを選べ。
- a. それらは普通「何を書くか」をのみ考えて書かれ、「いかに書くか」への顧慮がない。
 - b. それらは本来意志の伝達や事実の記録を旨としており、表現技巧への配慮が乏しい。
 - c. それらから受ける感動を重視するあまり、表現意識を無視するのは正しくない。
 - d. それらは大体事実そのままの記述であって、ほとんど虚構を加えていない。
32. 日記文学を日本文学に特有なものとする筆者の見解として正しいものは、次のどれか。
- a. 日記文学を生み出した日本人は、特に日記好きである。
 - b. 日記文学は、日本文学に特有な私小説の基盤にはなっていない。
 - c. 日記文学は、解体の過程にある時代に量産されている。
 - d. 日記文学と西洋の自伝とは、かならずしも同日に論じられない。
33. 本論文の表題としてもっとも適切なものは、次のどれか。
- a. 日記と自伝。
 - b. 東西の日記文学。
 - c. 日記と日記文学。
 - d. 日記文学の文学性。